

冬のリヴィエラ

先月の新聞各紙によれば、2023年のドル建ての日本の名目国内総生産（GDP）はドイツに抜かれ、世界4位に後退したということでした。（内閣府がGDP速報値をドル換算したところ、日本は4兆2106億ドルで、ドイツは4兆4561億ドルだった。円安が続く外国為替相場や物価などの要因で逆転されたとのこと。）ちなみに、日本は1968年に国民総生産（GNP）で西ドイツ（当時）を抜いており、ドイツの経済規模を下回るのはおよそ半世紀ぶり、日本は名目GDPで2010年に中国に抜かれ、世界2位から3位に転落していた。



こんな経済状況にありながら、日本の若いアスリートたちの躍進が続いています。サッカーでは久保建英（22、レアル・ソシエダード）や三笥薫（26、ブライトン）が本場欧州のリーグでも際立つ存在感を示しています。代表チームを見ても、2023年は野球、サッカー、バスケットボール、バレーボールなどさまざまな競技で日本は近年にない好成績を残しています。社会が停滞する日本でなぜアスリートは元気がいいのか。元日本オリンピック委員会（JOC）理事で筑波大教授の山口香氏は、「競技ごとの事情はあるにせよ、全体として言えることは、スポーツはお年寄りが活躍できないからではないですか。」「スポーツの世界では、現役選手の世代交代は必然。」「一方、政治や経済、学問の世界でも若くして頭角を現す逸材はいるが、それほど目立たない。」「上の世代はどうしても下の世代を過小評価して、認めない傾向がある。スポーツでは結果が明確に出るため、世代にかかわらず正当に実力が評価される。」と、解説しています。（卓見です！）

そんな中、プロゴルファー松山英樹選手は2021年のマスターズ制覇や2022年のソニーオープン優勝以来となる、USPGA通算9勝目を2月に行われた屈指の難コース名門の「リヴィエラ・カントリークラブ」で勝利しました。文字通り「冬のリヴィエラ」を征服したのです。（この大会の「ジェネシス招待」は、厳選された出場選手で争われ、優勝賞金の約6億円に加え、フェデックスポイントも700とメジャー並みの大会で荒稼ぎしたのです。一気にポイントランキング3位に躍り出て、世界ランキングでも55位から20位に浮上。4月下旬の今年のマスターズにも大きな期待がかかります。

さて、音楽の世界の「冬のリヴィエラ（港）」で印象深いのが、森進一のフォークソング風の「襟裳岬」に続き大ヒットとなった、ポップス風の同名のヒット曲でした。作詞した松本隆は、「第16回日本作詩大賞」で初のグランプリを獲得し、「NHK紅白歌合戦」でも、第34回と、29年後の第63回の、合計2回本楽曲を披露したほどでした。2013年、作曲した大瀧詠一が急死した際、森は大瀧を悼んで「冬のリヴィエラは、いまも私にとって大きな宝物のような一曲。大瀧さんの元に届きますよう、心を込めて歌わせていただきます」とコメントしたそうです。（私は、“crazyken”こと横山剣のカバー曲が好みで、ヘッドフォンでしんみり聴きたい私にとって珠玉の一曲でもあります。）

